法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-11-10

解題　「都市農業のサステイナビリティと社会的ネットワークの再構築に関する学際的研究」の経緯と成果、今後の課題

Nishikido, Makoto / 西城戸, 誠

(出版者 / Publisher)
法政大学サステイナビリティ研究教育機構
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
サステイナビリティ研究 / サステイナビリティ研究
(巻 / Volume)
3
(開始ページ / Start Page)
61
(終了ページ / End Page)
64
(発行年 / Year)
2013-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00008654

Hosei University Repository

解題:「都市農業のサステイナビリティと社会的ネットワークの再構築に関する学際的研究」の経緯と成果、今後の課題

西城戸　　誠

1　プロジェクトの目的と経緯

この特集論文は、法政大学サステイナビリティ研究教育機構（以下、サス研）における研究プロジェクトの一つである「都市農業のサステイナビリティと社会的ネットワークの再構築に関する学際的研究」（研究代表者・西城戸誠（法政大学人間環境学部）の中間的な総括として、発表することになった論考である。

本研究プロジェクトは、7名のメンバーから成立し、都市農業研究会を設立し、上記のテーマで調査研究を行っている。その研究主旨は、以下の通りである。

> 「都市農業」は、食料供給だけでなく、ヒートアイランド現象の緩和・雨水涵養・災害時の避難場所・余暇活動の場・環境教育・潤いのある景観など、都市において多面的な機能を果たしているが、実際の農業現場では、WTO体制下での農産物の貿易自由化が加速するなか、農業従事者の高齢化や担い手不足、高額な相続税や固定資産税の負担を背景に営農継続が危ぶまれている。よって都市農業を維持していくためには、今後は個々の農業者の経営努力に依存するだけでなく、周りの住民のサポート協力や市民活動―具体的には市民農園（体験型農園）や援農ボランティアなど―も必要である。つまり農業者（農家）と市民（非農家）という両者の“つながり”や“関係（性）”のなかで、都市農業が果たす意味や「持続可能性」を考察していかなければならない。

だが、都市農業についての先行研究は、おもに「農業経済学・農村計画」や「建築学・都市計画」などの分野で扱われ、そこでは個々の先進的な取り組み事例についての経緯や農業者の意識あるいは土地（農地）の利用制度のあり方については論じられてきた。しかし、その一方で都市農業を支える農業者の営農環境（家族構成、農業後継者の有無、農業所得・農外所得など）や今後の営農意向（継続 or 縮小など）、そしてこの取り組みに参加する市民や消費者の具体的な意識や考えまでを踏み込んだ分析や、農業者と市民それぞれの都市農業に対する思惑や期待の一致点ならびに相違点については明らかになっていない。さらに、最近、都市において障碍者や高齢者が農業現場に参加する取り組みが見られるが、都市農業の「サステイナビリティ（持続可能性）」を社会福祉との関係で論じる研究もほとんどない。このように現在、都市農業とつながる可能性のある取り組みが見られるものの、これらをつなぎ合わせるリンクができていない状況である。そこで本研究では「農業体験・労働」や「循環」という視点から農業者と市民の関係性やつながりの現況を

Hosei University Repository

明らかにし、「環境と福祉」の統合を考えるべく、社会福祉と都市農業の接点を捉えながら、都市農業の「持続可能性」のための社会的ネットワークの成立条件や継続要因を明らかにし、都市農業のサステイナビリティ（持続可能性）のための方策を模索し、制度や政策を立案する。

（法政大学サステイナビリティ研究教育機構HPより転載）

さて、上記のような問題設定を行った背景は、この研究プロジェクトの数名が、サス研成立以前から、法政大学エコ地域デザイン研究所（以下、エコ研）における研究プロジェクトに関わっていたことがあげられる。そもそも東京都日野市をフィールドとした背景には、東京都日野市の用水路に焦点を当てた調査研究を、エコ研という文理融合の研究体制で実施するという経緯があったためである。日野市の用水路に焦点を与えた研究成果は、社会学、都市計画、建築史などの領域で書かれた報告書を編集する形で、『用水のあるまち』（西城戸誠・黒田暁編、法政大学出版局、2010年）として一つの成果を出した[1)]。しかしながら、本特集論文に関わったメンバーの多くは、エコ研における建築史・都市計画の調査研究のスタンス、具体的には安易なフィールドへの関わりと見た目だけの判断による調査対象の内容理解の希薄さ、それに伴い地域社会に対する暴力的な視点の投企を盲目的に行っているという分析視角の構造的な課題を目の当たりにした。これらエコ研における建築史・都市計画の研究の問題点についての概要は、西城戸（2012）で論じたが、「水の景観や田園風景が大切だ」と人目を引くイベントの開催によってノスタルジーを喚起するだけではなく、丹念なフィールドワークに基づき、問題の指摘にとどまらない環境政策論の構想や、計画論を志向する必要性を、本研究プロジェクトのメンバーは共有することになった。日野市の用水路に関する研究は、黒田・西城戸・船戸（2012）、西城戸・黒田・船戸（2013）でまとめたが、本特集論文は上記の経緯や研究志向を踏まえた、日野市の都市農業に関わる論考が中心となって構成されている。

２　本特集論文の構成

本特集論文は、次の５篇の論文から成り立っている。最初の図司・佐藤論文は、都市計画法が制定された1960年代後半から今日に至るまでの「都市農業」に関する文献数と新聞記事数の推移に着目し、３つの時期区分（文献数が多い1970年代～1980年代前半まで：第Ⅰ期、文献数、新聞記事数ともに大きく伸びた1980年代後半から1990年代初頭：第Ⅱ期、新聞記事数も一定数を保ち、文献数がさらに伸びた1990年代後半以降：第Ⅲ期）を設定した上で、都市農業や都市農地のサステイナビリティを支える主体間の関係性に着目しながら、政策展開と都市農業に対する視点の変化を整理した。現在は、農業政策の再検討が本格化し、「都市農業の多面的機能をめぐる視点の転換」として、都市農業・農地を「都市施設」として積極的に位置づける視点や、「農のあるまちづくり論」と関連させる議論が重視されるようになった。この他、都市農地の「所有」問題が避けられない問題などもあるため、政策動向を見据えながら、農業者と都市住民が協働する現場の実態から議論を組み上げていく必要性が高まっていると指摘している。

第二に、舩戸論文では、都市農業における援農ボランティアに着目する。都市農家と市民（非農家）との交流と農業経営を関連づけた研究を補完する形で、日野市と町田市の取り組みを事例とし、援農ボランティアに取り組む市民とそれを受け入れる農家が、どのようにかみ合い、どの点において食い違うのかを分析している。そして、援農ボランティアに参加している市民やそれを受け入れている地元農家への聞き取り調査から両者の考えや思惑が一致するところがありつつも、すれ違う側面があり、その中で、援農ボランティアの課題と今後の可能性を指摘している。

第三の松宮論文は、舩戸論文と関連し、愛知県

Hosei University Repository

長久手市、日進市における非農業者主体で共同耕作を行う「農」の活動に着目する。都市部での「農」の活動の多様な展開を探る意義は、従来の研究では「農業」としての生産性の基準で評価することが多く、都市農地を舞台として展開される「農」の活動の多様性を見失うことに対する疑念があり、交流事業や地域活動への展開などの、「農」の活動の諸相を捉えることを主張する。また、農地の所有と管理、事業収入の獲得、行政との関係、活動の組織作りなど、「農」の活動の存続条件と展開可能性を明らかにしている。また、こうした上記二つの論文（舩戸論文、松宮論文）の知見により、今後、都市農業の比較研究の必要性と重要性が導かれたといえる。

第四に、西城戸・舩戸論文では、東京都日野市における、地場産農産物を用いた学校給食を中心とした「食育」の展開と、それを支える都市農業の実態を概観しながら、日野市のおける食育と都市農業の持続可能性について考察している。日野市では地場産農産物を用いた学校給食が古くから存在し、地場産農産物を学校給食に供給するシステムは一定程度機能している。また、日野市立東光寺小学校をはじめ、食育の実践としても高い評価を受けている。だが、都市農業の現状を見ると、学校給食用の地場産農産物の供給の持続可能性は低いため、都市農業の維持のための方策を考察した。また、よりよい食育を、多くの学校で実践するための仕組みとして、栄養教諭による食育の実践を紹介し、その可能性を考察している。

最後に、黒田論文では、これまでの特集論文の内容を踏まえて、「都市農業の持続性ということ」自体を問うものである。「地域再生」、「自然再生」のフレーズのもとに各地で取り組まれている公共事業や施策、有志の活動は、人と社会と自然のかかわり方を問い直し、結び直そうとする試みとして位置づけられるが、いったん喪失された / されかかったかかわりを取り戻す、あるいは創出しようとする取り組みを継続させることは容易ではない。第二、第四論文で事例とした、東京都日野市における農業用水路の維持管理のあり方が、都市農業が抱えている構造的課題と、都市農業に関して多様に繰り広げられている実践の間で揺らいでいることを明らかにした上で、いかにして都市農業は持続可能となるのか、生業としての都市農業と、都市農業にかかわる実践とを結びつけるかかわりという観点から論じている。そして「都市農業の持続性」は、それ自体総体として捉え直され、再定義されていくとともに、都市農業をめぐる１つ１つの実践の中に見出され、リンクを形成していく可能性を指すものであると結論づけている。

なお、埼玉県さいたま市に広がる見沼田んぼにおける環境と福祉の融合に関する論考は、都合により掲載できなかった。現在、都市農業研究会としても、見沼田んぼにおける都市農業に関する調査研究を多面的に行っている。都市農業に関する地域比較を今後のプロジェクトの課題として、別途、成果を報告したいと考えている[2)]。

注

1) なお、この書籍（『用水のあるまち』）を編集する段階で、編者らは、エコ研から本書の編集に関して一任された。にもかかわらず、社会学の専門性がない建築史を専門とする著名なエコ研の研究者から、書籍の編集に際して介入があった。また、編者の一人（西城戸）は、組織的なものも含む「さまざまな圧力」を受けたことは明記しておかなければならない。その意味で、『用水のあるまち』の論考の一部は「抵抗の所産」でもある。

2) なお、プロジェクトの成果として、本プロジェクトに関わったサス研研究員であった３名と、日本学術振興会特別研究員１名が、すべてアカデミックポストに就いたことを挙げておきたい。サス研は、若手研究者を養成するという目的でスタートした。その成果については問わないが、サス研からの研究資金を一切受け取らず、「弱小の若手研究グループ」である本研究プロジェクトチームから、全員就職をしたという点は、サス研の目的の一つを達成したと自負している。さらに、研究組織の運営に関しても、議論なき組織的安定や、数を集積し包括的な組織にすることでは、研究は進まないということも勉強させていただいた。記して感謝したい。

Hosei University Repository

参考文献

黒田暁・西城戸誠・舩戸修一 , 2012,「農業用水の“環境用水”化に見る資源管理の編成可能性」『環境社会学研究』18：126-140.

西城戸誠 , 2012,「「フィールドを学ぶ」ことの方法と意義」小島聡・西城戸誠編 , 2012,『フィールドから考える地域環境』ミネルヴァ書房 .

西城戸誠・黒田暁 , 2010,『用水のあるまち－東京都日野市･水の郷づくりのゆくえ』法政大学出版局 .

西城戸誠・黒田暁・舩戸修一 , 2013,「「環境用水」に見る都市農業の持続可能性：東京都日野市の農業用水路をめぐって」碓井崧、松宮朝編著『食と農のコミュニティ論』創元社 .

西城戸　誠（ニシキド･マコト）
法政大学人間環境学部准教授